

〔翻訳〕

ローマ人の信仰とローマ世界帝国

—1940年12月4日、チュービンゲン科学アカデミーにおいて催されたナチス大学教員同盟の講演—

ヨゼフ・フォークト 著

酒枝 徹意 訳*

古代の偉大な政治的な創造物の中では、ローマ帝国が、私たちには、最も親しいものである。このドイツに、またシュワベンに地に残されているローマ支配を物語っている物をまったく別にしても、帝国との相互関係の中で生まれたゲルマン人の諸国家とそれらの国家建設を通じて、私たちは、ローマと直接結ばれている。ローマ法やキリスト教、それに人文的教養において、何世紀にも亘って、ローマ世界との融合がなされて来た。

この歴史的関係が深いほど、ローマの世界支配と私たちとの精神的距離もいっそう強く経験される。Imperium Romanumの最終形態は、支配民族が被征服民族を支配する包括的な組織であった。帝国内の諸民族は、ローマ世界の文化、平和、経済組織を享受はしていたが、国家自体の独自の協同ということは、まったくなかった。帝国は、諸民族の共同体でも国家連合でも、決してなかった。そこに実際存在した空間は、今日新たな秩序を打ち立てるべく立ち向かっている空間と、恐らく等しいものである。地中海全域、中央ヨーロッパ、北方地域、さらにスコットランドから紅海に至る諸地域、ジブラルタルからカラパチアに至る諸地域が、それである。しかし、今日形成されつつあるこの大空間の秩序は、諸国民の固有の生活規範に適った基盤のうえに生まれるに違いない。指導的諸国家の中から、その空間内では異質な諸権力が遠ざけられる帝国が誕生する。要するに、その空間に組み入れられる諸国家は、その従属関係の中で自らに固有なものと、

* Tetsui SAKAEDA 本学文学部教授（人文学科）

自由の保障を保持していくのである。

ここで述べられた問題に関し、直ぐにローマ帝国の別の側面が思い浮かぶ。ローマ人の信仰、ことにローマの国家宗教とローマの権力政治ならびに帝国の形成には、どのような関連があるのだろうか、そのように私たちは問う。ローマの神々は、征服者の途を、軍団の勝利の戦を、殖民者の建設労働を、とりわけ国家指導の大いなる決断を、どのように導いたのか。ローマ世界を揺り動かす運命的経過のなかで、この問いは、頻りに胸中に去来するが、この関係について、かつて関連付けて考察されたことは殆どなく、また幾多のローマの解説でも顧慮されていない。それ故に、まったく奇妙なことに、ローマ帝国の一般的描写のなかでは、ローマ人の信仰は殆ど知られていない。宗教的信仰や供犠との本質的な結合を、まったく放棄している現代の諸国家との対比は、この問題では明確に過ちを犯してしまう。この現代的解釈の問題は、ローマに限らず、さらに一般的に古代諸国家の世界にも妥当する。エジプトやギリシアの諸国家であれ、ローマ人であれ、ケルト人であれ、要するに、この歴史的空間内のあらゆる政治的創造物のなかで、すべての民族は、彼らの生活を導き、その民族的生活を守り高める部族の、民族の、あるいは都市の神々、或いはこの世ならぬ様ざまな力とともに、多様な形で生きていたのである、という規準は有効である。神々は、国家や彼らの最古の制度の制定者とみなされ、神々に対する崇拜は、それ故言わば共同体的課題であった。国家のあらゆる内的変化や、その周囲との更なる深い関係は、供犠行為のなかに明示され、保持されている。ポリスの成立、成長、衰退は、その神々の姿と運命の中に現われる。ギリシア人の諸国家が、ペルシア人に対する解放戦争の際に、自ら一つの団体に結合したとき、この同盟を、彼らはデロス島のアポロン神への供犠共同体として、批准している。その最盛期、調和のとれた神々の家たるアテナイ神殿に見られる彼らの古く尊い供犠行為の大胆なレリーフのなかに、神々の前に立つアテナイ市民として、彼らは、その他では表しようのない自己表現をしていた。

これらの一般的知識の中から、大国家と世界帝国にいたるローマ国家の経過を読み取ることにはしたい。また、その場合、この過程での幾多の決定的転換期において、ローマの神々を本質的に捉えることに限定したい。そのことが先ず求められていることなのである。ここ数十年、多くの研究が、特にローマの神観念や信

仰の傾向というものを活発に明らかにしてきた。共通のインド＝ゲルマン的なものとはそれは関係を持ち、また一方、北方観念とも関連している。同じく、地中海周辺の原住民の宗教的世界と、それがいかに対立していたのか、その点も明らかにされた。エトルスキやギリシアとの関連も指摘されているが、最も近い親戚であるイタリキとの関係の中で、ローマの特別の位置というものが作られたのは、明らかである。個々にはなお議論の余地も多いが、しかし多いほどローマ的神観念は、本質的に固有のものであることが、いっそう確固とされるように思われる。その観念は、最古の時代にまで遡って追及されるのであるが、それは、その後数世紀に亘って生きて、働き、さらに様ざまの時代、諸外国の神々をその内に新たに受容してきたローマ人は、神的なるものを驚くべき威力として、言い換えればあらゆる出来事を貫いているところのものと捉えていたのである。神は、家の戸口、竈、台所に生きているのであり、また耕地の豊作、竈の繁栄、家族、氏族、都市の成長と共にそれは、働いているのである。この世のあらゆる領域に神々が絶えず働いていることが感知されるのであり、そのことは、例え神的なるものが、なお形を取っていなかった初期でも、そうであった。言い換えれば、田畑において、播種において、さらに収穫において、誕生、出産において、そして成長と死において、この様にあらゆるものを貫き、あらゆる出来事に働いているのであった。その力は、多くの名称で呼ばれており、その効能に応じて色々である。仮に、新たな出来事が発見されれば、それは、新しい神が知られたということである。世界は、宗教的に理解も解明も果てしがたい。何故なら、あらゆるものには神々が満ちている、という言葉はローマ人にとってまったく真実であったからである。

人間は、これらの様ざまの力の活動分野のいわば中間的存在であり、人間たちは、神々の呪いと恩恵を自由な裁量に任されている。こうした時間の内に起こることの発生因である力は、悉くその働く範囲は決まっており、かくしてその力の領域が知られると共に、その権利の要求がなされるが、しかし、これは人間に幸いなことである。神秘に満ちた働きにただ注意を払い、神々が与え、結果として生じる様ざまな暗示を常に繰り返し、人は、把握、保持しておかなければならない。ローマの神話学者、ヴァロを読み、パン屋や家に住む住人として、こうした神々の住処を知らねばならない。このような惧れと配慮を、ローマ人は*religio*と呼んでいた。家族のなかで、神々の力を司るのは、家長の仕事であり、共同体

では、王の任務であり、自らの苦難も、また創造的なことも神々から受け取ったのである。王が交代した時は、共和制的な指導者の職務に就いた貴族保有者が、国家の血族法に則り、国家の宗教的義務を負う。王制の初期に、すでに供犠組織は生まれており、神々との友好関係 (*pax deum*) を、それが共同体に保証していた。国王顧問団としての聖職者団体と官職保持者たちは、神々に相応しいことにはすべて配慮し、神々の恵みを得、怒りを宥める。大神官は、供え物、犠牲さらに年間の祭礼を定め、神々の権利の主張に応える。神々の意思を知るために、鳥占いは特別の任務を帯びていた。鳥の飛翔と天の徴により、神々の同意と協力が得られるまでは、国家的行為や官職の就任、民会や軍隊の出陣もまったくなされなかった。神々の意思を知ることは、その役職に就いているものたちに独占され、それ故彼らは、政治的行為を演じたのである。鳥占者は、彼らの専門的知識を通告するだけの者ではなく、神々に訊ねることの権利と国家から託されて行動すること、言わば *auspicium* と *imperium* は、常にひとつの事柄に属し、彼らは神々と人々の前で行動することを任され、それは彼らだけのものであった。

古代ローマ人の信仰のこうした大雑把な特徴づけは、次のことを示しているように思える。即ちローマに見るような国家と宗教の結合は唯一無二であると。古代世界において、このように包括的方法で国家的に神々の崇拝を行ったポリスは、一つとしてない。個人的誠実さは、ここではまったく問題とならない。しかし一方で、宗教的救済が示されることのない国家的関心事というものもまったくなかった。その場合、政治的指導者は、同時にまた共同体の説教者であり、コンスルとして前兆を観察し、犠牲を捧げ、或いは自身が聖職者団体に加わったが、それは長い間貴族たちの特権であった。国家のこうした政治的指導と宗教的指導の結合を、ローマ人は祖先の最高の知恵として受け取ってきた。しかし、とりわけ神々の意思を解釈するその奇妙な形式、また権威ある方法という点で、ギリシア人にもゲルマン人にもまったく見られないものであった。神的なるものに、絶え間なく訊ねることが求められていた。ローマの都市建設者ロムルス鳥占いから、一高級政務官の最後の行為に至るまで、《神がそれを欲している》という言葉で説明される。この言葉が、数世紀に亘るローマの政治の根本的モチーフを示している。

この都市の始まりまでに遡ることのできる信仰に対する態度が、ローマ人の宗

教性の独特の要になっている。こうした観点に立てば、いずれの神が力があるとか、どの神々が隣り合わせ、並んで崇拝されていたのか等ということは、この考察にとってはそれ程重要ではないように思える。政治的役割というものは、古くからの土着の永続的に存在している神々と同様、周囲から入ってきた神々に対しても存在した。様ざまの外国の力ある神々がローマに入っていたようだ。国家祭儀において祭られるのは、第一にイタリキの諸部族からの神々であり、さらにエトルスキ、ギリシア、また最後にはオリエントの神々の姿も見られた。ローマのパンテオンは、古代世界の神々の全体を現していた。まったく古代の多神教のごとく、ローマ的な教義では、他の共同体の神々も、実際に存在し、しかもその神々は、現実には力を奮っており、明確な前提の下で個々に国家祭儀に編入され得るであろう、という解釈であった。ローマ人は、確かに新しい力あるものを見つけ出すことを常に考慮し、そして新しく得られた守護神の正当な要求を満足させようといつも気を配るように、この世ならぬものを把握し、信ずることにおいて、特別の才能を持っていたようだ。神々の世界の拡がりとは、野蛮な征服や民族的本能に依らない盲目的な掻き集めではなく、しばしば国家の拡大と軌を一つにしていた。ローマの七つの丘の勝利と団結、ラティウム地域での政治的指導権の確立、イタリアの征服、地中海域の支配・・・これらすべては、また神々の劇場でも起きていた過程でもあった。個々の神崇拝の受容は、貴族の政治団体である元老院が試みと決定権を握っていた。元老院は、また異邦の神々の世界から危険物を解毒し、新しい神々を神聖かつ正当な地位に確定すべく、古い神々の優劣に習熟し、指導的国家の秩序思想が、神々の領域にも貫徹するようにその義務を果たした。元老院のこの政策を、いくつか例を挙げて説明するとすれば、例えば、新たに加わった神々は、ローマ市内の神聖な領域では、殆ど崇拝されず、またギリシアの諸供犠は、国家神官団の特別な監視の下に置かれていた。しかし国家供犠の内に受け入れられたあらゆる神的なものは、ローマ人の共同体を守護するものであった。ローマ人が、どのように激しくこうした神々を自ら求めるのに努めたかは、神々を遺棄したり、また求めるそうした例の中で明らかである。敵対する都市が包囲され、間もなく陥落すると、指揮官はその都市の神への厳かな祈りの姿に変わり、敵にあらゆる形式で投降することを勧め、ローマに権限を譲れば、神殿と祭儀を約束した。新たにローマに入ってきた神々の応答こそが、ローマ人

の信仰の歴史に見られる多くの供犠の受容の最終的理由である。その信仰者、信奉者が増えれば増えるほど、天上の守護者は、いっそうその増加を求めるのである。

イタリアが征服された英雄時代の歴史は、古来の神々と新しい神々がどのように国民を扶助し、彼らが武器によりどのように勝利を得たのか、またその領土の拡大にどのように神々が働いたのか、こうした報告で溢れている。勇者に対する神々の恩恵と明確に神々に信頼を寄せた人々による指導ということは、ローマの民族的伝統に深く根差している。絶対に拒否をしない相談者のアポロンがそこに存在するが、ローマにアポロンが伝来することで、ギリシアの神託とかシビュラの預言書が蒐集され、またそれと共に苦難に際しての最後の救済手段とかが伝えられた。そこでは、国家の緊急時、例えば飢饉、悪疫の場合、ケレースの神やアスクレピオスの神のような救済神が存在したし、或いは反乱等の時代には、コンコルディアが存在した。これらは、ローマ人が、いかに彼らにとって個別的領域に常に神的なものを見ていたのか、ということを明らかにしている。様ざまの戦では、ユピテル、マルス、ヴィクトリアといった神々は、共に戦う者であり、さらに勝利の授与者であることを証する。ユピテル＝ヴィクトル、ユピテル＝スタトル、マルス＝プロプグナトル、マルス＝インヴィクトス、これらは個別の添え名であり、それにより戦の性格と無敵の力をその主な神々は示している。しばしば説明されているが、対外的危機の最中、最高指導者が厳かに神々に祈願し、その助けを求めた場合には、神殿建設を約束し、勝利の後に、その約束が果たされた。少なくとも、ローマの神殿の半数は、戦の指導者により、その戦場に建設された。ローマのこうした神殿は、その存在そのものにより、また永遠に献納の動機を伝えている献納碑文とか、その間に奉納された戦利品や献納物によって、或いはその崇拝に結びついた祭儀によって、ローマの勝利を記念した場所になったのである。しかし戦は終わっていなかった。真のローマ人であれば、支配欲が強く熱心であればある程、ローマの神々にもローマの領域が拡大することを考慮するように願った。五年毎の共同体の課税と査定が済み、ローマの国民がマルスの原に集まると、ケンソルが古来の儀式に則り、国家を清め、神々にローマの支配領域の安寧と拡大を願い、公的な祈祷を捧げたのである。国力の増大と国境の拡大に際して、神々の働きは、非常に永続的であり、最高戦争指導者として、数年

前にカルタゴを破壊したあるケンソルは、《われわれの土地は、豊かで十分に広い。だから、神々がそれを永遠に無事に見張っていてくれるように願う。》と繰り返し語ったことも、心に留めていい。

しかし、こうした神々は、決して戦の盲目的デーモンでもないし、ローマに敵対する世界の凶暴な破壊者でもなかった。ローマ人に信仰されていた神々は、彼らと共に戦うが、その戦いは、敵対する国の神々とその一族の撲滅を目指す聖なる戦いである、と云うような観念は、彼らにはまったく縁遠いものであった。ローマ人は、この様に信じていた。ローマの神々以外の神々の存在とその崇拝、そして他の国々のその独自性に対する尊敬が、そうした宗教戦争を排除した。しばしば、古来神々自らが、戦争状況の説明、国家間の合法的契約の違反、戦争における敵兵に対する一定の措置等を、良心の力に従うように強いたのである。ユピテル自身、天上の神であり、宣誓の主であり、契約の監督者であったが、フェティアレスの非常に古い神官団を通じて国家間の正当な交わりを監視していた。*Jus genticum*が作られるより、さらにギリシア哲学の影響を受けるより遥か以前、ローマの宗教は、正当な戦争という概念を生み、それを生き生きと維持してきたのである。他国に対する正常な関係は、敵対的行為によって破られるが、それは、先ずはじめに、正当な要求に関するものであるという契約上の宣誓とともに、そのフェティアレスの神官団により名誉の回復が求められた。この要求が拒否されてはじめて、神官団によって戦争の布告がなされるが、敵国は、不正義であるという契約上の保証がそれに結びついていて、次いで、元老院が最終的決断を下し、戦は、敵国の領土に槍を投げ入れることにより始められた。以上が、ローマの求める定めであった。戦争が、この様な関係の中で、正々堂々で行われる限り、戦争はローマ人にとって正当で真剣なものと見なされたのである。その場合、形式的手続きを済ましているかという事のみが、問題であったのではなく、長くは続きはしなかったが、神々への信仰が、道徳的なものと結びついて行われていることが重要であった。ローマ人は、他国民に対する正当な関係を、良心的義務と考えていたことは、次のことから明らかである。というのは、ローマ人は、他国との関係をも同胞に受け入れられる義務として神々の信仰の下に服せしめたのであるが、ユピテル崇拝から生まれる一つの力として、その信仰が人々に対し内面的に、法的強制力を持たせていたのである。*Fides populi Romani*は、ロー

マ神官たちの自己正当化のための発明ではなく、神々の生きた力であり、それがローマの偉大さと出会い、数世紀に亘る信頼へと他の諸国を向けていったのである。*Fides populi Romani*、即ち、ローマ国民の信義こそが、他の諸国民にローマに依存し、服属することに道徳的価値を与えると共に、ローマを指導国家として、受託者として、また伸展していく国家として歩ませることになったのである。この形式の中で、ローマの要求、言い換えれば秩序正しい諸国家の世界の建設を通じて道徳的指導の遂行を目指すということが、明確になる。しかし、ローマの同盟国や服属国の側に歩み入れば、諸国家を良心的に支配していると認めることには抵抗があった。しかし諸国の信頼できる証拠に依れば、少なくとも基礎を造ったローマの創生期には、ローマ的信義が祝福されていたのであったが。

戦時も、平時も、火急の時も、平穏な時も、神々はローマの繁栄と未来のために働いていた。神々は、年々歳々の祭りの輪の中に共同体を導くのであるが、その最良の部分は、農民の祭りの中に存在していた。また、神々は祈願に対し、常に繰り返し世代から世代に、世紀から世紀に継いで国家に勝利を齎した。ローマ帝国は、空間的にも、時間的にも無限であるという考えが、明確な形をとるよりも遙か以前に、永遠に続くであろうという洞察が始まっていた。最も力があり最も尊崇されるべき少数の神に対しては、その古い神聖な場所を、高価な担保として守っていた。そして、神々を無事に祭っている限り、ローマ世界に勝利と支配が保証されたのである。その信仰に相応しく、北方から移動してきた侵略者にまで遡って、天の神から与えられた聖なる守りを、戦いの神からの贈与として、また担保として受け取った。ヴェスタの神は、ヴェスタの乙女たちによる国家の竈の火によって保持され、守られていたが、それは、ローマの永遠性を保証していた。さらにミネルウァが加わる。ミネルウァ信仰は、三世紀以来のものであるが、その神は、トロイアの滅亡後のより高い使命を帯びていたアイネーイスの祖先であり、イタリアに前途有為なパラスの姿を運び込んだのである。ここにもローマの宗教的資質が、余すところなく証明されている。ローマは、諸国家の神々を担保するという明確な考えを、色いろと変えながらも、常に生き生きと保持してきたのである。

ローマの神々の政治的機能は、ある神の姿にはっきりと現われている。ユピテル・カピトリヌスの中にである。ローマの宗教におけるその地位は、また次のこ

とも表している。即ち、たとえ、その神が外来のものであっても、信仰形成は外来のものにはならない、ということである。ローマの王政期の終わり、エトルスキ王政時代に、カピトルの丘に大きな神殿が建設され、ローマの勢力がはじめてラティウムにまで及んだということは周知のことであろう。このエトルスキの先例に倣い、ギリシア生まれのユピテル、ユノー、ミネルヴァという一つに結びつけられる神々の祭儀の代表的神殿が、市の中心に必要なになった。祭儀とか神殿について、エトルスキ人によって置かれていたにも拘わらず、共和制初期に、ユピテルは、全面的にローマ風な遣り方と関連させて、このカピトルの三対の神々の中から突出し、さらに貨幣の見事な刻印には、ローマの支配者、ローマ人の王となっていたのである。エトルリアやギリシアでも、またそれまでのイタリアでも、ユピテルは、崇拜においては、冥界とか貴族の家柄とかと関係していた。ところが、ローマでは切り離され、ユピテル・カピトリヌスは、専ら *res publica* の神であり、国家の安寧のみを任され、共同体の自由市民によってのみ尊崇された。かれは、*jupiter optimus maximus* と呼ばれたが、そのわけは、即ち、神々がその領土のいっそうの繁栄と拡大を齎すように、公的祭儀で常に祈願していたローマ人たちは、イタリアの地のあらゆるものの中で最良、最大のものは、尊崇されている *Ioves* が所有しているものと信仰していたからである。その神殿で、その年毎の共和政期の最高役職者はその任務に就き、選ばれた最高司令官は、その神に向かって、国家の名において誓約した。この神に、他の都市や指導者たちは、供え物と犠牲を捧げ、この神のうちにローマを代表するものを見たのである。最高指揮官が勝利を収めた戦いの最後に、凱旋し、ユピテル・カピトリヌスの神殿に詣でたが、それは大変に凝った芝居であった。しかし、はじめから芝居であったのではなく、いわば祭儀の行為であった。即ち、誓約を果たし、国家の感謝を示すために勝利者がやって来たのであって、かれが、ユピテル自身の飾りで飾られた四頭立ての馬車に乗り、そのことをなした時、その生涯においてこの日は、その勝利者、権力の保持者は、勝利を与え、戦いを完遂する力そのものであるユピテルに等しいということを表していたのである。カピトルの丘の神は、だからローマの国家理念の体现者であり、その屋上に四頭立ての馬車が飾られていた神殿は、共和政期のはじめから帝政期に至るまで、ローマの支配を担保するものと見なされていた。

しかし、大いなる力に溢れた多くの守護神は、ローマ国家を、満ち足りた安穩の中にも、怠惰な安逸の中にも導きはしなかった。Religioは、保護を意味するのではなく、神性に満ちた諸力を思い、畏怖し、予見し、行為することを意味していた。偉大な国家に至る道は、危険と有為転変に溢れるとともに、そこには常に配慮すべき動因があり、その動因こそが政治において、宗教においてローマ国家に変わりなく献身し、励ましを与えてくれているのである。第二ポエニ戦争の大災禍は、根本から宗教的動揺を齎した。これまでの考えでは、個々の指揮官の失策を無視し、戦場における敗北を宗教的過失に帰した。都市民衆は、不安を抱き、新たな外来の神々の祭儀とか信仰とかに顔を向け、すべてが、警告と恐怖の徴で満ち、自然界の秩序の乱れと、神々の怒りをそのことが知らせていた。戦場における勧告、支援と同じく、国家指導においても同じような考えと行為をなす力を、それは生み出した。彼らは、シビュラの預言書、エトルリアの犠牲劇そしてデルフォイの神託という非常に権威あるものに尋ね、新たな宗教的崇拜と祭儀の導入を決意した。小アジアの大地母神信仰をその崇拜の内に加え、聖なる隕石を手に入れ、明らかにそれをローマに運んだ。その神を最後の守護者として、敵をイタリアから追い出そうとしたのである。国民の全面的帰依とあらゆる神々が力を奮い、勝利を得た。今日、トラジメーノ湖で敗れた後の興奮の坩堝を眺めたならば、その敗北の責任問題が問われていたのであるが、一般的には、次のように答えられよう。軍事的失策と共に、祭儀とまた鳥占いの無視が認められると。さらに、戦の栄光に満ちた最後の勝利は、指揮官たちと軍隊の勇敢さ、元老院の賢明さ、同盟者たちの支援ということの他に、何よりも神々の助けこそが、感謝すべきことであると。はじめてオリエントから受容された公式の崇拜である大地母神信仰が、国家の多くの神聖な場所に、周知のローマ的姿、形で加えられているのは、何も驚くべきことではない。

長期間に亘ったこの戦争の経験は、ローマ人に世界を統治する使命感を起こさせた。ざっとした問いに、我われの史料は、以下のように答えているように思える。先ずはじめに、ギリシア人たちが、ヘレニズム専制国家にアレクサンダーの世界帝国の後継国家をなお認めたように、ローマ人たちも、ローマの興隆を経験し、世界を統治するという考えに接近していった。第二ポエニ戦争が終了すると、ギリシアに対する賛歌とか歴史の叙述の中で、ローマの権力は、空間的にも時間

的にも終わりがなく、またアッシリヤ、メディア、ペルシアそれにマケドニアという初期の世界帝国に取って代わるものと称えられたことも、明らかである。しかし、ローマは、その支配権の基礎を世界に独自の方法で築いたのである。この時代の政治的創造物の構成部分として、*maiestas populi romani*という概念に出会う。それは、支配を被り、従属している諸国家に対するローマの優越性を示しており、また遠方の様ざまの国家を同盟の中に加えるために義務付けられていたことは、*fides*という考えであった。ローマのImperiumは、*patoricium orbis terrae*として、世界を保護するものと理解された。この世界支配の宗教的表現は、ギリシア人たちには、受け入れられなかったが、それは、世界を支配する新たな力の中に女神ローマを認め、彼女の神殿や寺院を建設したのである。この時代に至るまで、ローマ人は、この女神について何も知らなかった。彼らは、別の方法で、ローマ国民の創造力である*genius populi romani*を尊崇していたが、付け加えれば、他国民にもまた、そうした女神の生きた力を認めさせたのも、それであった。ユピテル・カピトリヌスは、その意味では、国家神にはならなかった。この神の崇拝は、ローマ市から伝播して行き、ローマの植民市、特にローマとの同盟を求めている外国の諸都市にも確かに存在していた。しかし、この神が他の神々を駆逐してしまうに違いないとか、国家の唯一の守護神であるというような考えは、ローマの世界には存在しなかった。

本質的に、ローマ人の宗教性は、決して排他的なものではなく、他の諸国民の信仰よりも歴史的な世界の神秘をただ包括的に、より深く理解することを求めていたのであった、と言えよう。ローマ人は、この意味では地上で最も正直者であり、戦争における戦術や政治的資質と共に、このような資質を持っていたのである。共和制末期に、キケロが言っているように、ローマ人は、《宗教によって、言い換えれば、神礼拝において》世界の上位に位置し、帝政期にサラスティウスが祖父の時代についてはっきり言っているように、ローマ人は、《最も正直な人間であろう》という主張は、ローマ人の自己理解として確固として存在していたのである。既に考察がなされた正直さと篤信、それに比べようがない賢明さの中で、こうしたローマ人の資質に基づいて、その時代の宗教的革新の担い手や証人は、ローマ世界の興隆と世界支配のその原因を、神々の命令によって、あらゆる

ものが支配され、方向付けられているということに帰したのであった。キケロやアウグストゥスの時代にはっきりと姿を現すいっそう古い声、例えばポリビオスやポセイドニオスといったギリシア人の歴史家や哲学者は、ローマの国家生活における宗教の卓越した役割を賢明に洞察し、それを特徴としたのである。ギリシア人の説明によって、ローマ人は、はじめて自らの特別の正直さと言うことを意識し、発見したと信じるには、しかし更なる研究が求められる。未だギリシア的判断がなされていない時代に、こうしたローマ人の無比の誠実さについての言説のはっきりした痕跡が、文学的に遡って探求されねばならない。ローマの伝説では、すでに三世紀に戦争好きの王ロムルスと正直者のヌマ王とを強く対比させていなかったであろうか。この資質が、英雄アイネーイスの姿を作らなかったであろうか。彼は、自らの国の神々と彼の唯一の父を、猛炎に包まれたトロイアの町から救い出したが、そのことは、神と父親に対する *pietas* を象徴的な形で示していなかったのであろうか。第二ポエニ戦争以来のローマの国家的指導は、ヘレニズム世界に対する政策を、その特有の正直さとローマ国民の恩恵に照らし合わせ、正当化している根本的証拠が存在している。193年、ローマは島嶼都市 Teos を承認したが、そこにあったディオニソス神殿は、深い尊敬を得るとともに、またアジル権と免税権を享受していたのである。そこに書き残された文には、はっきりと次のように記されている。《我われは、例外なく神々に誠実であり、常に最善の注意を払っているということを、とりわけ神々によって、そのことの故に我われに与えられた恵みから洞察すべきである。》ここには、次のような考えが要約されているのである。即ち、特別の彼らの誠実さについての確信、並びに彼らの勝利は、この誠実さに拠っているものであり、彼らに生きて働く神々の恵みに基づいているという確信、こうした認識こそが、数世紀来ローマの指導層を奮い立たせて来たのであった。

ローマ的なもののこの自己理解は、ローマの国家宗教の特性の中に、とどのつまり、その根拠を置いているのである。この共同体組織における、比類を絶する誠実な神々の諸力についての主張に注目し、さらに、他のどこにも無いような政治的な様ざまの決断が、神々の明白な同意の下でなされて来たのであれば、多くの同時代人の好意的な経験からは、それ故、偉大な勝利は神々の恩恵の特別の証であるという結論がどうしても湧き出て来たに違いなかった。これが、生来、

ローマ的と呼ばねばならない考え方である。供犠行為の成果と繁栄は、一対になっているという観念は、多くの国民が保持していた。古代のオリエントも、それを知っていたし、多分エトルスキも知っていた。要するに、これら地域の様ざまの民族にとって、このような一般的見方は、決して特別のものではなかったのである。古代ギリシアでも、幸福は、神々の愛人であると信じられていたし、神々の友情は、人間の誠実さに拠ると信じられていた。ゲルマン人自身、熱心な供犠行為が、神々による保護と共に幸いなる人生を保証する、という見方を示している。だが、ただローマにおいてのみ、こうした見方が、偉大なる政治的な息吹を経験したのである。このローマで、力に溢れた国家が、神々を崇敬し、神々の意思を尋ね求めることで、歴史を貫く方途を、確保したのである。この澆刺とした国民は、他の国民よりも神的なるものをより深く洞察し、かつより密接に結びつくことが可能であると自負した。こせこせした祈禱ご利益主義と同様に、神的なものに対する卑屈な恭順とは遠く隔たり、彼らの誠実さにこそ、その身の安全と力の汲みつくせない源泉が存在していたのである。

これこそ、神々と彼らの結びつきに関するローマ人の信仰であり、選ばれた民であるという信仰の本質であり、歴史の支配民族を、神々と直接的に関係付けたものであった。私たちが、このローマ人には周知の、支配者としての使命の宗教的基盤を、ひとたび他の帝国の国民の使命感と比較してみれば、これが、ローマ人に特有のものであることが、いっそう明瞭に理解される。また同時に、今日なお、私たちを生き生きとさせている様ざまの表象的な世界から引き出され、あらゆる現象に対して、私たちの批判的精神が刺激される。キリスト教世界の内部では、最初期には、イングランドで、選ばれた国民という表象が発展せしめられ、また最も強力に作用した。中世初期以来、ブリテン島とノアに至るまでの旧約聖書に見る貴族家系の系統図を結び付け、かつ最も古い神的な使命との結合を生み出そうと、人々は思案した。イングランドでは、宗教改革が歩んだ独自の経過から、英国教会が、《真正カトリック》であると自負し、それ故宗教と政治の完全な融合の内に、世界教会への衝動を持つようになった。しかしながら、さらに清教主義が、旧約聖書の選ばれた民についての表象の公的な継承とまたその倫理的深化へと導いたのである。イスラエルの役割に関して言えば、英国国民の起源は、

イスラエルの離散した部族から出たものであるという伝説が、近代において、広範囲に流布していたことが認められるということで、それは充分なものになろう。その使命と恩恵の証拠は、個々人におけると同様に国家全体でも、外部に現われた結果から明らかになるという思考は、旧約聖書や、清教主義に由来していたが、それは、多くの国家建設者たちの忍従に満ちた力と同様に、近代社会の満ち溢れた活力が、生み出した考え方であった。神の委託と見なされる支配とは、諸国民に永続的な責任を負うこと、言い換えれば全人類に対して、それを負うことであり、ボールドウィン自身が数年前に言ったと信じられているように、自由と平和という最も高い倫理的価値を現実化し、そして地上に神の国を創り出すことなのである、というような主張は、言わば帝国主義的信仰、また自信と傲慢に由来する要求の一部なのである。ローマ的な支配信仰は、このような神学的な訓練を、まったく受けていず、またこの信仰は、それ故に宗教からそんなに多くの扶助を受けず、無論こちら側も全くの歪みを見せることはなかった、ということを直ちに知るためには、こうした政治的宗教の様ざまな諸要素とローマ的理念の構造とを対比する必要がある。キリスト教的神観念の超越性が、イギリス的な選ばれた民であるという考え方に驚くべき性格を与えたのであるが、一神教は、必然的に神の委託の範囲として全世界を示唆し、別の諸国民も同等の権利を持つという考えを排除する、言わば多神教が決して成し得なかった排他主義を生む。勝利を神の恩恵の徴として見ることは、ローマ人にもイギリス人にも現われていることであるが、ローマでは、しかしあの自己正当化というものを持ち出すことはなかったが、私たちは、その過ちをイギリス人の考え方の中に観るのである。既に見たように、ローマの宗教は、国家の道德に、とりわけ諸国家の正当な関係というものに本質的に関連していた。ローマの宗教が、いかに長期間倫理的義務を果たし、かつそれを生き生きと保持していたにせよ、後に崩壊の始まりに際して、その説明のために、形式主義によって、契約違反と恣意的行為が正当な理由であると、はっきり言明されねばならなかった。けれども、そうした考え方を、道德的に正しいものとして主張するのは、ずっと先のことである。ローマの宗教の道德的な影響範囲というものは、それ程広くはなかった。ローマの宗教は、それ故また、道德的不誠実さを美德としてしまうようなことはなく、その点では、イギリスの使命信仰程ではなかった。ローマでは、確かにある時代に、利己的な帝国主義に

よる覇権という考えを排除し、国家による権利能力剥奪を自由な精神の行為として、統治の修練を平時の仕事として主張したにしても、こうしたことは、神が与えた特権を引き合いに出したりせず、個々のケースで起きたのである。

宗教と政治が独特の遣り方で関係しあっているが、一方また、消えつつあるようにも見える日本国民の使命信仰が、ローマ的思考の近くに存在している。今日に至るまで、生き続けている神話によれば、その始まりにおいて、太陽の女神は、その曾孫を国家に封じた。この神の元から、王朝は由来し、一養子縁組によって、系譜図中のあらゆる断絶は無視されてはいるが、生きている天皇は、神であり、彼の祖先たち同様に、国民生活に啓示を示す。しかし神々は、また国民の英雄であり、あらゆる貴族たちの始祖でもある。全国民は、常に神々との一致を保ち、それ故《神ながらの道》（神道）を進むことが、日本人の敬虔さの本質なのだ。それ故に、敬虔な人々、特にお役人や高官たちは、私的、公的生活での重大な決断をする際には、崇拝している神々の神社、特に巨大な神社である伊勢神宮に、神々の協力を求めてやって来る。天皇自身、国家の重大の事柄について神々に報告をするために、赴く。神々の賛意と支持の取り集めは、まったくローマの鳥占いの遣り方と一致している。しかし、日本では、この破れることのない神々との結びつきの結果、誠実さや恩恵において優っているという主張は、起こらないどころか、日本人は、既に選ばれていると見なされている。何故ならば、日本人は、神々を起源に持った地上で唯一の民族であろうから。その信仰によれば、彼らの天皇は、再度、いつの日か全人類の王になるであろうし、世界の支配を実現するであろう。この使命信仰の生きた力を、私たちは、今日、経験しているのであり、日本の全国民、特に強く指導層が、そのことを確信しているのを見る。国家の根本的な政治的革新は、ある貴族とか政党の指導者によって主張がなされるのではなく、最終的には、現人神の天皇によって指導される。これらの点にまで、日本帝国における新たな国家秩序は、遡るのである。この政治的信仰は、現代の科学的な世界の説明に殆ど基づいていないと主張しているが、確かに、この主張は、周囲の世界の宗教から、かけ離れており、それらを遥かに超越している。天皇の決定によって自由に定められるのであるから、神道は、仏教やキリスト教のような宗教ではまったくなく、それは、多分存在している諸宗教を超えた聖化された国家的職能なのだ。それは、あたかもわが道を歩むかのごとく、始まりから争い

を抑え、そこでは、政治的宗教は、学問的思考や個人的神探求と、調和することが可能であった。いずれにせよ、私たちも、ローマの政治的信仰におけるこうした軋轢を知っているが、一方またこの信仰が、まったく別個の、完全な独自の解決策を見出したのも知っているのであるが。

第二ポエニ戦争の後、統治者層は、議論の余地なく権力を所持していたローマのノビレス階級の者たちであった。宗教もまた、国家的組織として彼らの領分に、含まれていた。供犠が、世界におけるローマの権力を保証し、また同様にローマにおける貴族の支配的地位を保証しているのだと、明白に理解し、外国からのあらゆる論難に対して、とりわけ東方のセクトの狂信主義とか個人的救済願望に対して、元老院議員や高官たちは、宗教的遺産を擁護したのである。けれども政治が、一定期間、十数年を経ると、その間ローマは古代世界の東方領域を獲得し、共和政期の宗教的装置をいっそう習熟して利用することに嵌り込んで行った。鳥の飛翔と天の徴を観察する鳥占いは、政治や国家の指導者たちが願っていることを、ただ認めるだけになり始め、エトルスキの犠牲観察官も、負けてはいなかった。大カトーは、この活動に対し次のように語っている。二人の内臓検査官が、それが始まると、ニヤニヤ笑ったりしないことに、彼は驚かざるを得なかったと。宣誓による義務に基づく祭司の権利自体が、帝国の指導層の權益に従うように曲げられていった。137年ローマのコンスルC. ホスティリウス＝マンキヌスは、彼の軍もろともヌマンティア要塞の前で取り囲まれたが、軍を救うために、自由に撤退することと引き替えに降服した。一般のスペインの民衆のごとく、既にローマ人の言葉を信用しなかったヌマンティア人たちは、コンスルと軍の高級将校たちに降服条約に宣誓させた。しかしにも拘らず、ローマでは、この条約は、元老院によって否認された。今や、誓約違反の罪を清めるべく、コンスルの引渡しが決定的にされ、彼は、裸にさせられ、贖罪の山羊として敵の要塞の塔の前で縛り付けにされた。ヌマンティア人は、この犠牲を拒絶したが、しかしローマ人は、少なくとも彼らの良心に照らして救われたと感じた。—とも角その事件直後の、宗教の悪用の意義深く、非常に批判的な一事例として。神々への信仰的帰依と良心の束縛が、伝承してきた供犠で育った上層階級の者たちには、消え失せていたように思えた。ギリシア人歴史家ポリビオスが、かつて合理主義者として、宗教とロー

マ国家の緊密な結合を、大衆を支配するための政治家の賢明なる発明であると主張し得たのは、十分に理解され得ることなのだ。

この宗教の世俗化を促進したものは、先ずローマ的見方であり、ローマ的仕組みであった。というのは、もしも人間が、先ず神々をただ有めさえすれば、人間の能力や行為には、広大な活動領域が任せられているという人々が、ローマには、遙か昔から住んでいた。同時に、ギリシア哲学が、それらのヘレニズム的遣り方で、少なくともある時期、古ローマ的信仰の解体に寄与した。世の成り行きと人間の歴史への神々の関与を否認したエピクロスを、その点で人は評価するが、しかしまた、実際の諸宗教は、神的なるものの理解がまったく不十分である、というストア哲学の教えは、強い印象を与えていた。マリウスの同時代人で、大神官Q. ムキウス＝スカエヴォラは、ローマ的な国家神官にとっては吃驚するようなテーゼを主張したのであるが、それは、神々の理解には、互いに異なる三つの見解が存在するであろうというものであった。即ち、詩人による神秘的なそれ、哲学者による学問的なそれ、そして国家の役人たちの政治的なその三つである。真理は、ただ哲学的神学においてのみ認識され得るのであるが、このことは、しかし国家宗教にとっては、まったく無用なことであった。というのは、しばしば有益かどうかという理由で、国民は、信仰の事柄において欺かれるに違いないからである。国家宗教は、神学とはまったく無関係であるという解釈や、また、今日の日本に関し、そのことを初めて知ったように、その宗教の本質の解明、これらの問題は、恐らく、ここから、さらに進む道が存在しなかったのであろう。

それ故、この道は、まったく歩まれなかった。しかしローマ人の固有の信仰的素質に関しては、この時代にも、数多くの解説がなされ、残っている。ローマの政治的な使命信仰というものは、古ローマ宗教に由来しており、やっとそのことについて考察するに至ったのであるが、あらゆる人々の心のうちに燃え上がっていたこの使命信仰が、宗教に新たな命を吹き込んでいたのである。国家宗教を政治的なしきたりへと貶めることが、存在していないとは誰一人真剣に考えてはいなかった神々の様ざまの力は、直接、ローマ世界ではなく、恐らくまったく別の国民にこそ相応しいものである等と譲歩して認めたのであろうか。しかしこうした認容は、内乱の嵐の中で、高貴なる血が流され、またゲルマン人の怖れとかアジアの反乱が、帝国のその基盤を揺り動かしたような時、言わば革命の世紀には、

耐え難いものであった。帝国をめぐる滅亡の危機に際し、灰から甦った不死鳥のごとく、再び父祖信仰が起り、一般的なローマ的な流儀を熟慮し、深められて行ったのである。さらに、第二ポエニ戦争の時代のように、ローマ国民の中にこの覚醒を促進させたのは、ローマの貴族や旧き伝統の代理人たちであった。ローマの使命に対する信仰、およびそれと同時に、ギリシア哲学と深く関連している神々の信仰が、侵害しあうのではなく、いかに共鳴し合っているかを、私たちは、キケロに見るのである。私たちはまた、教養のあるヴァロの中に、宗教的見方と宗教的慣習の学問的探求が、信仰の復興を結果的に生み出すというまったく例外的現象に遭遇する。カエサルの勃興と没落が呼び起こした恐るべきカタストロフィーは、再び、彼らの祖父たちのように熟慮し、経験をしたところの人々によって、長い期間に亘って蔑ろにされてきた神々の礼拝に対する、神々による罰として理解された。神々に再び戻ることが、道德的健全化と帝国の安定化のための唯一の方法と考えられた。始めは、まったく来るべき救済を予期していなかったその当時、詩人ホラティウスは、次のように告知している。

汝は、罪なしと言えども、父祖の過ちの代価を払い、
ローマよ、新たな神殿を起すまで
神々の社の直き支柱は、揺らぎ、
煙が、像を汚している。

汝は、神々に仕えているからこそ、治め、
ここで、始まり、ここに、終わりを求めよ：
多くのことが、神々に、嘲られた神々に由来するのだ、
ヘスペリアよ、嘆けよ、汝自身と災いの。

正にこの覚醒のとき、国家と国民に対し、内乱の混乱を克服し、共和制時代の残滓の上に、個人的国家指導、言い換えれば一人支配を生み出したアウグストゥスその人のうちに、ローマが蘇ったのである。彼の政治的な活動は、その血と精神における国民の新生であり、世界におけるローマ支配の安定化であった。この新生と安定化という両者とも、多く一族の者たちに代わって、彼が成功したが、

その際に、彼は民族の最も深い生命の源から、新しい力を引き出したのである。彼自身も、それに彼と共にあった部下のもの達、ローマ＝イタリア国民も、オリエントの諸国家に対するローマの神々の勝利として経験したアクティウムの勝利。この方、彼は、政治的、宗教的復興を同様の基本的見方から、また同じ目的に従って成し遂げたのであった。過去の過ちの補償の一つは、先ず次のことであった。即ち、今まで長らく放置されたままであった供犠を再興させ、衰微している諸神殿を立派に堂々と再建するとともに、忘却されたり、或いは悪用されていた国家の神官職を再び正式のものとするのであった。アウグストゥス自身、その著名な神官団に所属し、その権能と尊厳さを獲得し、そして父祖たちの遣り方に倣って、神々の意志を確かめ、またそのことに従事しているもの達の面倒を見たのである。それ故、彼は、甦った国家にとっては、むしろ共和政時代の官職者や神官以上の存在であり、国家への神とその恩恵の仲介人であった。彼が、自ら個人的な保護者として尊敬していた神々は、アポロンや復讐者・マルスのように、国家生活においても、またその特別の地位を保持しており、かつまた国民と国家のためにカピトルの丘のユピテル神殿の傍らの、アウグストゥスによって創建された彼らの聖所が、宗教生活の中心になったが、これらは、当然のことであった。旧い慣行に力を取り戻し、意味深く変形された威厳に満ちた世俗的祭儀を通じて、重苦しい過去は克服され、新しき幸いに満ちた年々が始まったということが、ローマ国民に意識されるようになったのである。ここに帝国の拡大と安定という、この敬虔な仕事の目的が明白に表現されるに至った。これらの祭儀の際に、支配者（たるアウグストゥス）は、大地の創造力に対する祈りと、カピトルの天上の神々への祈り、それにパラティヌスの新たな守護者に対する祈りを捧げたのであるが、その祈りは、古来の遣り方に従って、マルスの息子たちのこの世の幸いを表明していた。即ち《我は、願い、祈り奉る。汝が、クイリナリスのローマ国民の力と権威を、戦時においても平時においても増し加え、ラテン人の共同体を常に守らんことを。クイリナリスのローマ国民に、変らざる平安と勝利の力と健康が授けられんことを、またクイリナリスのローマ国民に、寛容であられ、その版図が、健やかに維持されんことを・・・》

祈祷と供犠、それに神殿奉仕と神官組織により、平和は、神々と共に甦り、帝国の繁栄のための前提条件が成就した。これらのこと全てを履行した支配者（た

るアウグストゥス)は、Pontifex maximusとしてあらゆる国家の供犠行為の指導権を握り、同時に彼以後の皇帝権のために、模範的に政治権力と宗教的聖職叙任を彼一身の中に統合したが、それは、まったく首尾一貫したものであった。

ここで指摘されるべきは、アウグストゥスの働きは、理想的な共和制的組織の単なる復活ではなかったということである。軍事指揮官及び共同体の最高聖職者として、ローマの王に特有のものであったあの高き地位を、プリンケプスは、再び獲得したのである。まさに彼は、国家の新しい礎石を築いた者として、世界そのものの救済者として、支配国民および帝国の服属者のために、それを獲得したのであった。たとえ、彼以前の権力保持者たちが、神王というオリエンツ的理念を理解し、ローマにそれを持ち込もうとしたとしても、東方の諸国民に対し、父祖伝来の支配者崇拜の形式を拒みもせず、彼自らの国家の信仰から、神々の治める領域をいっそう拡張する手段を、アウグストゥスは見つけ出したのであった。ローマ人たちは、人間に、その生命を通して付き随っているゲニウスに対し、創造的活力として、常に宗教的崇拜を捧げてきた。即ち、彼らは、その一族の長とか貴族の血統の国家の聖職者たちの中に、この神的能力が特別に存在していると考えていたのである。アウグストゥスの時代が、その最初の証拠を示しているわけではないが、都市の父祖であり建設者であるアイネーイスやロムルスについて、彼らは、死して、神になったであろうと信じていた。ローマを死の危険から救い出したマリウスに対して個々のローマ人が無定形の崇拜を捧げた際に、また移民者たちが、その殖民された地において、都の建設者のゲニウスを崇拜する際に、こうした政治的な創造者へ与えられる神の恩恵に対する信仰は、それと同じであった。《それは、存在する》と、キケロは、彼の国民のこの見方に、同時にまたギリシア人の哲学的考察に同意している。《その行為によって、人間の創造が神々の高み近くまで、昇りつめることが出来るような、そうした行為は、新たな国家建設とか、既存の存在しているものの維持の外には、まったく存在しない。》それ故、危機と絶望の一世紀の後、国民と国家に新たな生命を奮い起こさせたこの人間は、まさに半ば神的本質を持っている者として立ち現われたのである。既に彼の養父は、死後、divus Iuliusとして、国家の神々の下に受け入れられ、彼は、それを保持し、神の子 divi filiusとして、彼の生涯を始めたのであり、彼の諸行為の気高さにおいて、尊厳なる者(Augustus)の名に相応しく、卓越せるも

のであり、その名において、恩恵に満ち溢れた創造者そのもの (*auctoritas*) であり、その賢明さは、神々の意図 (*augurium*) を適切に探知していたことを示していた。国家建設者のこうした神秘的能力が、国家指導の新たな形式として、帝国の一つの本質的要素になったのである。単独で包括的なインペリウムを占有したプリンケプスは、また最高の鳥占いの権利を有していた。彼が、何らかの行動の実行を、誰か委任者に委託するような場合、神々の意思が求められた。また、必勝の気に満ちた出征の後には、彼の軍団は当然の勝利が要求されたに違いなかった。彼は、一人で神々の恩恵を媒介したのと同様に、彼は、自身単独でローマの神による勝利の力を帯びていた。皇帝のうちに勝利が存し (*Victoria augusti*)、皇帝のうちに平和が存し (*Salus Augusti*)、皇帝のうちに帝国の永遠性が存し (*Aeternitas Augusti*)、これらが、まさに皇帝崇拜の前提であった。

その場合、専政という不遜な主張とか宮廷神学者たちの無責任な様ざまの意見は、問題ではなかった。私たちは、ヴェルギリウスの偉大な詩、英雄アイネーイスの歌をその証拠として持っている。支配者の神的能力に対する信仰が、あらゆるローマ人の心の中にいかに満ち溢れていたか。これらの経験によって、また世界支配の使命感が、いかに繰り返し奮い起こされたか。この世の使命への献身において、いかに信仰生活の更新が、その最後の基盤を見出したのか。アイネーイスは、例えローマの先史時代の歌であるにせよ、彼によってあらゆるローマ史の隠された意味が明らかとなった黄金時代の建設者であるアウグストゥスが、その中で明確になる。この太陽によって、ローマの過去が照らし出されるのであり、何世代にも亘る危機、あらゆる英雄たちの指導、これらはその始祖である父祖アイネーイスにまで遡るのであるが、これは理念的姿であり、そこにローマ国民は、自己の表象を得たのである。彼は、勇敢にして誠実であり、こうした徳性を通じて幸福と勝利の担い手であった。ローマ国家の理想的支配者として、その行為は、卜占、供犠、祈願と共にあり、あらゆる決断の際には、神々との一致がなされた。しかし、神々の絶えること無き一連の徴は、ユピテル自らが、告知し、アイネーイスとその相続者たちの歴史を、運命として決定した始原の言 (*Urwortes*) の遂行に過ぎなかったのである。

《これに、時と処の定め無く、無窮なる国家を、我は、授く。》(1、278 f)

世界をその支配下に置くというローマの使命は、アイネーイスと彼の国民にとって、神的なるものの意思に基づく使命になった。この使命の確信は、不可解なるものの前での恐れ、運命的な必然性を身をもって知るということを、排除している訳ではないのだが。この確信が、戦いと危機の際には、しばしば、あたかも永遠に変化して止まない一瞬を意味しているかのように、天の約束を理解し、それを成就するべく、無敵の体力と澁澁とした勇気を授けたのである。ローマの使命と同様に運命 *das Fatum* が、ヴェルギリウスの宗教世界の中で、神々の驚くべき出現とか絶える事なき人間による供犠行為に、究極的意味を与えていた。詩人の説明では、それはまた、アウグストゥスによる新たな創設を待望し、かつ共に形作ってきた一族の宗教であった。支配者崇拜とその使命についての思いから、父祖たちの神々の世界の礼拝の秩序を、それは再び取り戻したのであった。

支配者（であるアウグストゥス）のこの神的能力は、あらゆる者たちにより生命の中心であると認められ、誉めそやされてのいたのであるが、それはまた、国家の供犠の中に具体的姿を獲得していたに違いない。神々のうちに入れられた先駆者であるユリウス・カエサルを、人々が神のように神殿や神官団を通じて崇拜したのであれば、それは、ローマ的感覚に相応しい形で、生きている支配者に宗教的崇拜を捧げることを示唆していた。その際、人は、アウグストゥスのゲニウスを、宣誓のための神的なるものとして扱い、それに犠牲を捧げたのである。はじめ、勝利を授ける神を信奉していたローマの軍隊は、あらゆる駐屯地に、皇帝像を神聖なる軍旗とともに置いていた、それと共に、その礼拝の際には、軍団の鷲や隊旗とかが置かれて、それらが軍の宗教の核を形成していたのである。だが、皇帝の神的な力は、支配民族のみならず、同様に帝国の被支配民族にも及んでいた。ローマの属州においては、それぞれの相応しい遣り方で、皇帝崇拜を公的組織の中にまで高めていたのは、矛盾したことではなかった。ローマとアウグストゥス、またローマの都市の神々と称揚される支配者の共同崇拜は、東方の国々において、また西方の諸地域においても、決まりになっていた。その場合、その都市、その部族、その土地の集会や属州集会の代表者たちが、あらゆる被支配民族とローマとの結びつきをはっきりとさせるために、こうした礼拝の実施機関に位置づけられた。ローマが、自ら新たな制度をもって、支配せる諸国民の神礼拝に介入し

たのは、初めてのことであった。共和制時代には、非ローマ世界へユピテル・カピトリヌスを拡大することを控えていたが、帝政は、たとえその諸形態は、様ざまに異なっていたかもしれないが、皇帝崇拝を決まりにし、それと同時に国家宗教への手がかりを与えたのである。

こうしたアウグストゥスの政治的な信仰の新たな形成が、いかに後々まで力を振るっていたかを見るにつけ、それは驚くべきことである。カピトルの丘の神々の崇拝、軍隊に勝利を与える神々への崇拝は、国家の役人や兵士、新たな土地の植民者たちに浸透していった。さらに皇帝崇拝は、市民たちに対してと同様、属州のローマ化された上流階級のものに対しても、徐々に自己了解された国家信仰、帝国信仰に成っていった。アウグストゥスによって市民とか、国家宗教への東方の神々の浸透が断固として食い止められたことに、いっそうローマ人の信仰の価値の高まりが認められるのである。これらの小アジア、シリア、エジプト、ペルシア伝来の諸崇拝の、長期間での帝国西方への拡大とか、公式に認知を得ようとする努力が、阻止されなかったとしても、アウグストゥスによって喚起された種々の力の作用が、その領域内で感じられたのである。これら東方の神々の信奉者たちは、民族的にはまったく雑多であったかもしれないが、彼らには、ローマ国家の神々を信奉し、皇帝神を崇拝すること、軍団の勝利のために祈祷を捧げること、こうしたことは決まりと見なされていたのである。ユダヤ教のセクトとキリスト教徒の集団のみが、その宗教的な根本的見地から、皇帝に犠牲を捧げる国家崇拝の全てをはっきりと拒絶した。皇帝の側が、基本的に争いを避けるために、ユダヤ教徒に対しては繰り返しその権利を更新し、それは、ユダヤ人には上首尾であったが、ローマ国家とキリスト教の対立は、情け容赦なさを明らかにし、帝国は、自らの宗教的権利を擁護した。とりわけ皇帝崇拝の実施は、帝国との内面的一致の表明と同一視され、それを拒むことは、国家とその文化に対し敵対することの明白な印と同一視されたのである。これらのことは、この時代の多くの両者の対立の文書や沢山の訴訟でも立証されている。しかし、キリスト教徒が、彼らの神に対する帰依により、最後まで繰り返し宣伝し、また彼らが、皇帝と国家のために、彼らの神に祈りを捧げていることに注意を喚起した時、哲学的批判が抱かれ、この神に対して異議が申し立てられただけではなく、何世紀にも亘るローマなるものの政治的な信仰を消してしまうことに、強く異議が申し立てられたのである。

ケルソスは、キリスト教徒への論争文書で、声高に叫ぶ、《君たちは、だが期待などしていない。ローマ人が、君らの信仰を許可し、自分の宗教的、政治的伝統を捨て、君らが名づけている、最も高き方である君らの神に、懸命により頼めば、彼が天から降りてきて、彼らのために闘うかも知れず、だからローマ人は、まったく他の助けを必要としないであろう等とは、君らは予期していないのだ。その同じ神が、君ら自身が言っているごとく、かつて、彼の信仰者たちに同じこと、しかもより壮大なことを約束していたのだ。だが、今や、その神が、ユダヤ人や君らにも同様に、尽くしてくれたことを君らは見ている。ユダヤ人は、世界帝国に代わって、一欠片の土くれも、竈も手に入れることが出来ず、君らのかなりの者たちは、迫害され、捕えられ、死に追いやられているのを・・・》

そこに、私たちは、真剣なローマ人の声を聞くのである。新しき神は、ローマ世界とはまったく関係なく、無力であることが示されていると。しかし、以前のどの世紀よりも、三世紀の黙示録的危機においては、国家指導が、神々の力と助けに懸かっていた。疫病が地方に広がり、ゲルマン人とペルシア人の突入が、帝国を、最早果てしなく増え続ける辺境の戦に突き落とした時代、打ち破る力を持つ神々に対する叫び声が響き渡っていた。とりわけ、なお旧き伝統の担い手である元老院は、危機の根源を、神々を疎かにしていることに見、宗教的能力を限りなくかき集め、(帝国の)救済を確保足らしめ得ると信じたのである。イリュリア＝パンノニア地方出の家柄にも関わらず、この世紀のローマイデーを感覚的に理解していた極めて稀な皇帝たちは、宗教的に必要な事を執り行う人物であった。キリスト教徒を含む全帝国の住民たちが、広範囲な祈願祭の際に、犠牲を捧げる祭壇に、もし近付いたならば、それ故に、神々は制圧されるに違いなかった。この魔法的観念は、周知のように、デキウス皇帝のあの神への捧げものに由来しているが、それが全般的なキリスト教徒迫害を引き起こしたのである。

だが、神々へのこの激情は、絶望的な行為であり、彼は、新たな信仰の力を煽り立てることは、既に出て来なかった。ハンニバル戦争やアウグストゥス時代の宗教的な運動とは異なり、一つの不吉な新たな現象が、そこには存在した。即ち、いまや多数の人々が、役人の代行とか職務上供犠行為を装うことで、ついには国家による供犠の実施手続きと強制執行によって、駆り集められねばならなかったのである。それに背を向けた者たちのグループが取り戻されることは、もはや不

可能であった。しかし、その地の代行者たちの眼前で、犠牲を捧げ、犠牲の肉を食らった国家的な供犠の支持者たち、数え切れない群衆たちにも、完全に状況は別のものになっていた。これらの人々が和解した神々は、もはや政治的迫力を持たず、またアウグストゥス時代にはあった宗教の国民的一致を持たなかった。皇帝の法により、全地域の帝国住民は、ローマ市民とされており、いまや国家供犠への外国の神々の侵入になお抵抗してきた最後の砦も打ち壊されたのである。マルクス・アウレリウス皇帝が、マルコマンニ族との戦争が起こった際に、様ざまの種類の宗教の祭司たちが、ローマにやって来て、帝国の安寧のために、彼らの礼拝を執り行わせられた。三世紀、オリエント諸地域が重要になればなるほど、帝国の辺境の民族や種族は益々身勝手に行動し、それ故に公的に認知された外国の神々の数は、いよいよ多くなり、それでいっそう組織を守れず、組織力はますます弱体化していった。帝国の神々の世界と民衆の動揺を東方のある卓越した神性に任せることを、二、三の皇帝は試さなかったわけではない。しかし、太陽神の勝利に満ちた姿自体、また *Sol dominus imperii* と、神狂症 (Theomachie) に浮かされている中でずっと主張すること自体十分には強力ではなかった。また、皇帝礼拝は、帝国の統一とかローマの勝利のために、あらゆる力を結集することを保証するには、もはや不十分であった。しかもこの時代の支配者崇拝の形態は、甚だしく高められていた。しかし、矢継ぎ早の兵士出身の皇帝たちと共に、またどんな神学的体系にも、適切に組み入れられない互いに張り合う君主と共に、その存在価値は、落ち、止まるところを知らなかった。かくして帝国は、またその宗教的現象形態においても、解体状態にあった。古代世界の最後の危機の最中に、神学の中に逃亡した哲学者たちは、あらゆる民は、あらゆるものの支配者によって、彼自身の固有の守護神を持ち、彼によって固有の民族的性質を受け取るのである、という教えを垂れていた。それと共に、彼らは、キリスト教との戦いの中で、あらゆる大小の民族、国民の神々の崇拝を再興することの根拠付けを述べていた。それからまた、彼らは、皇帝権と信仰の強さに関する最後の結論についても、語っていた。それを呼ぶとすれば、幽霊であり、彼らは決して退治出来ない。

ローマなるものの宗教的活力が、もはや消耗され尽したように見えたその瞬間に、キリスト教がローマ帝国を我が物にした。その一神教は、帝国の内的な結束において神々と人間の無秩序を身をもって経験していたものには、帝国の普遍的

傾向に合致した神観念のように見え、正に相応しかったのである。皇帝の世界国家とキリスト教の世界的信仰の共属性は、キリスト教の代表者たちが、既に何世紀も前から繰り返し繰り返し強調してきたことであり、さらにアウグストゥスの時代に、これら両者は、殆ど同時にこの世に現われたということが注目せられ、支持されていた。ローマの国家供犠と密接に結び付けられていた勝利の神学が、またキリスト教信仰に浸透するに至る瞬間が、まさに今、やって来た。コンスタンティヌス皇帝は、新しき神の標を、自らの勝利の標、自分の軍隊と帝国全体の勝利の標とした。その力をしばしば実際に示し、彼に次々と勝利を齎したその神を、布告の中で、彼は、帝国に導入することを告知した。皇帝として、なお国家供犠の最高神官であった彼は、勝ち誇り、勝利により適切とされたキリスト教の神への移行を、注目に値するローマ的やり方で実行し、このキリスト教信仰の普遍性を、彼の帝国の支えとしたのであった。こうした宗教的転回のローマ的根拠は、過去のすべてに、取り消し不可能な、画期的性格を与えることであった。

新たなローマ人として、若々しいドナウ流域のインド・ゲルマン的な民族的諸分子の出であるということは、カピトルのユピテルから離反することが、ローマにおいてその伝統を支え、神殿の世話をしてきた旧い家柄のものよりは、より容易になされたことは、明らかである。しかし今なお、元老院階級の家族の者たちがおり、彼らは、父祖の信仰と世界帝国は、分かち難く結び付けられているという確信を胸に秘めた貴族であり、教養とローマ人の信仰を保持していた尊敬すべき後継者であった。元老院の集会室に長期に亘り据え置かれ、伝統的遣り方で崇拜が捧げられてきたヴィクトリア祭壇を、あるキリスト教徒の皇帝が、元老院から遠ざけた際に、もう一度ローマの異教信仰の炎が、燃え上がった。そのときに、ユピテル・カピトリヌスの最後の信仰者たちの代表者による懸命な嘆願が聞こえてきた。《この信仰が、世界をローマの法の下に治めさせた。この宗教が、ハンニバルを城壁から、ガリヤ人をカピトルの丘から追い払ってくれたのだ・・・我われに、一つのことを認めよ。我われが、少年期に経験したことを、いまや古い風習として我々の後継ぎに遺産として残すことを。》この言葉は、まったく支持を既に失っていると同時に、生き生きとした確信を持ちながら、移り変わり行く世界に、神々しく沈んでいく顯官を明らかにしているのであった。

訳者付記

この論文と当時テュービンゲン大学名誉教授であった古代史家ヨゼフ フォークトに関し、訳者は、以前に少し触れた経緯がある（『アミアヌス マルケリヌス、覚え書き』四国学院大学論集、1986年3月、第62号、60ページ。そこで、フォークトについてのわが国での簡単な紹介にも触れているから、ここでは略したい）。その後この論文が行方不明になり、研修中であったローマのドイツ考古学研究所でなした粗訳の推敲も出来ず、そのままになっていたが、最近図書整理の際に偶然見つけられた。そこで、改めて、原文と照合しつつ訳し直した次第であるが、難しいところは相変わらずであった。誤訳、読み違いは、当然ある筈。忌憚のないご批判、ご指摘をお願いします。（例；237ページに出るTheomachieは、調べがつかなかった。それ故、Theomanieとして訳している）。

また、imperium、Römertum、Kult、-kult、Volk、-volkなど頻出するが、帝国、帝権、支配権、ローマ、ローマなるもの、ローマ的なるもの、ローマ世界、ローマ人、また-kultは、供犠、崇拜、礼拝、信仰など、そして-volkは国民、国家、民族などと適宜変えている。その他Macht、Herrschaft、Herrscher、Führerなども易しいようで訳し難い語である。また文中に、その時代の言葉「・・・国家社会主義的慣用語の吸収を明確に示している諸作品」（Karl Christ, *Joseph Vogt*, GNOMON, 1987, Bd.59 H.5 S.478から。これは、1986年7月4日、92歳で逝去したフォークトに対する追悼文である。）の一つで正にあるゆえの用語、例えば〈様ざまの人種〉などの表現は、同様に適宜民族、国民などと訳している。敢て人種と訳す必要を感じなかったからである。むしろ、先のような論文として読むならば、〈人種〉としたほうが、時代の空気を現しているかもしれないが・・・。なお、文中、天皇と訳されているのは、すべてKaiserである。

これは、表題にも記されているように既に半世紀以上前の講演である。恐らく2年後の発表に際し、ある程度詳しい注が加えられたようだが、この訳では、全て省略した。今日的意味での学術論文として読むことは有り得ないと考えたからである。また古典からの引用も、他の独訳やらが用いられたり、様ざまであるが、これもフォークトのドイツ語原文に従った。

確かに、60数年前のある厳しい時代の空気を吸収したと考えられる見解が一部に見られるように思うが、しかし、全般的に見れば、正に表題の示すように、「ローマ人の信仰とローマ世界帝国」の関係を、まさにローメルトゥームの特質にまで掘り下げて論じており、今日個々のテーマはますます狭く、細部では訂正されるべきことも多いと思われるが、全般的に、しかもこのようにコンパクトに論じているものは、なお少ないと言えるのではないのか。

ナチス期における古代および古代研究の問題については、1998年にチューリッヒ大学でコロキウムが催され、その内容は下記のように刊行されている。フォークトは、しばしば言及されているが、特に、Jürgen v. Ungern-Sternberg、「Imperium Romanum vs. Europa. Gedanken zu einigen Vorträgen deutscher Althistoriker in den Jahren 1939 bis 1942」は、フォークトを主題のひとりに取り上げ、論及している。なおフォークトに関しては、学位論文がモノグラフとして発刊されている。

Beat Näf (Hrsg.);

Antike und Altertumswissenschaft in der Zeit von Faschismus und Nationalsozialismus.

Kolloquium Universität Zürich 14.-17. Oktober 1998.

Mandelbachtal-Cambridge, 2001.

Diemuth Königs ; *Joseph Vogt* : Ein Althistoriker in der Weimarer Republik und im Dritten Reich.

Basel und Frankfurt a.M., 1995.

なお、NSD. Dozentenbund (=Nationalsozialistischer Deutscher Dozentenbund) については、田村栄子著『若き教養市民層とナチズム—ドイツ青年・学生運動の思想の社会史—』1996、名古屋、の第九章「ナチス「大学革命」と大学・学生」を参照のこと。また、山本尤著『ナチズムと大学』（中公新書775, 1985）も簡潔ながら、この時代の大学の様相を興味深く記している。

出典 ; Joseph Vogt. *Vom Reichsgedanken der Römer*. Koehler & Amelang Leipzig, 1942. SS.118-169.